

図書館たより

号数	第 69 号
発行日	昭和60年 6 月 15 日
編集	島根県立図書館
発行	松江市内中原町52
	TEL (0852) 22-5725
印刷	島根印刷株式会社

桜江町の図書館の現状と課題

桜江町教育委員会

教育長 原田 静 雄

桜江町民図書館（コミュニティセンター図書室）は、昭和56年4月開館してから4年経過しました。その間、県立図書館のご指導をいただいて内容の充実に努めてきました。現在県立図書館の貸与冊数(1,500冊)を含め6,500冊の図書があり、町民1人当たり1.4冊の蔵書数になります。貸出冊数は年間4,000冊で、町民1人当たり約0.9冊利用したことになり、年を追って町民の図書館に対する関心はたかまり、利用者数も着実に増加している現状であります。

特に、町内企業の今井産業より 毎年100万円の寄付をいただき、現在300万円相当の今井文庫を設置していますが、今後も継続されることを約束されています。

県立図書館のご厚意により、親子読書活動に続いて59年度より子供読書のモデル町村の指定を受けて保育所幼児、小学校児童を対象に、保育所・小学校の先生方、母親の協力で読書活動を推進してきました。特に子供読書においては、20名の婦人ボランティアの方々の積極的な月1回の読書指導のお蔭で、

本町の幼児・児童の本に対する関心もたかまり、読書習慣も身につくつあります。

町内に読書会が3グループあり、それぞれリーダーを中心に活発な活動を続けていますが、町全体としての読書人口は少ない。特に、現代では活字離れ・読書離れの傾向にあります。人間一生のうち感性の鋭い20才前後に読んだ本はその人の一生の知識や感情を支配するといわれています。この大切な年代である青年層の読書に対する関心をたかめるための事業や、一般町民の図書館利用についての事業計画を樹てる必要があると思います。

「図書館は知識の宝庫、読書は頭の栄養」といわれています。生涯教育が論ぜられている現在、その一環として図書館の事業を本町の読書推進協議会を中心に、関係諸団体、町民の協力を得て、内容の充実と併せ活発に推進していく計画であります。

「図書館は知識の宝庫、読書は頭の栄養」といわれています。生涯教育が論ぜられている現在、その一環として図書館の事業を本町の読書推進協議会を中心に、関係諸団体、町民の協力を得て、内容の充実と併せ活発に推進していく計画であります。



私たちの文庫活動 ③

出雲市西林木町 岡 登

昭和58年5月3日、地域文庫を設置オープンして今年で2周年になります。今、振り返り反省してみると良いことをしたな、の一言に尽きます。長い間懸案していた事が実現したのです。

私は長い間、出雲市立図書館に勤めていました。その間、子供室を担当していた事もあります。図書館に来る子供達の90%が図書館を中心とした半径2km以内に住んでいる子供達でした。やはり遠すぎると出掛けるのが難しくなるようです。学校で自由に市街地に出掛けることを禁じられている関係もある

でしょう。同じ出雲市民でありながら図書館に近い市民は、始終利用出来るのに遠距離の山間部の小・中学生や幼児は利用したくても図書館に行くことが出来ないのです。これでは実に不公平であり、遠距離の子供達は可愛想です。この不公平を少しでも解消するためには2km毎に児童図書館を建てる必要があります。けれどもそれだけ多くの図書館を作るのは財政的にも困難です。そこで図書館の代わりに地域の住民の誰かが自分の家の一部を解放し、

図書館から図書の貸出しを受け、文庫を開けば子供達もさぞかし喜ぶだろうと常々考えていました。

昭和59年の11月1日、オープンを目指して出雲市立図書館が市の大津町新崎に新築移転することになりました。新館に備え、図書の購入が急ピッチで進み、大量になった本の置き場に困り、書庫や宿直室はもちろん通路にもはみ出す始末でした。そこでこれらの本の利用をと念願の文庫を開くことにしました。とりあえず、童話・伝記等子供向けを中心に300冊を自宅に持ち帰り、近所の小学生達に貸出しを始めました。

開館から1カ月目に34人が利用し、貸出冊数は延130冊にもなりました。学校でもこの文庫が評判になり、夏休みに入ると利用者が急増し、遠くの地域が

らも友達同志誘い合って借りにくるようになりました。夏休みの終り頃には、本箱はがらあきとなり、100冊余だけになってしまいました。急遽100冊の図書の追加を行わなければなりませんでした。

現在では常時利用者は50余名です。中にはここで読んで帰る子供もあります。子供達は好きな本を書棚から取り出して、貸出しノートにきちっと名前と返却日を書いて借りて帰ります。留守の時もあがり込んで本を読みながら留守番をしてくれる事もあります。「学校にはないクイズの本もあって楽しい」

とってクイズの本等を借りて帰る子。「市の図書館は遠くて行けないがここは近いし、いつでも借りられる」といって毎日のように来る子などいろいろな子供達が自由にやってきます。

この様な子供達を見てみると新刊をもっと増やしたり、リクエストの本も購入し、少しでも希望に応じてやらなければと思います。そうしてやる事が子供達の読書意欲向上にも通じ、本好きの子供に育ってくれることと思います。

最近では子供さんと一緒

に大人の方もこられるようになり、大人の本の貸出し希望があり、大人の本も少しずつ増やしていこうと思っています。大人の利用者は3名だけですが、本を増やせば利用者ももっと増えるのではないかと思います。昭和60年3月で出雲市立図書館を退職しましたが、市立図書館と連携をとりながらこの文庫活動を続けていきたいと思っています。幸いにも、出雲市立図書館でもこの地域文庫を全面的に支援して頂いており、委託文庫の拡大も検討されていますのでこれからこのような文庫がもっと増えていくことと思います。又、そうなることを願っています。

- 所在地 出雲市西林木町527 TEL (0853)22-8738
- 休館日 なし
- 開館時間 9:00～22:00



おすすめしたい子供の本 小学生向

県立図書館では毎年子供の読書週間にちなみ、おすすめしたい子供の本①②③の目録を作成し、各教育委員会・小学校・幼稚園等へ配布しています。今年度は幼児前期向に80冊、幼児後期向に170冊、小学校向に252点推薦しました。次に小学生向の中から数冊紹介します。

あかいろうそく—新美南吉童話選集—(低～中)

渡辺三郎絵 大日本図書 960円

知ったかぶりをするサルが村へ出て、赤いろうそくを拾う。それを花火だと思ったサルは、動物達を集めて打ち上げることにする。胸をおどらせて待っている動物達、しかしろうそくは静かに燃えているばかりだった。新美南吉のみずみずしい童話が7編。

いえでぼうや(低～中)

灰谷健次郎作 坪谷令子絵 理論社 780円

小学校1年のマサトはいつもお母さんと意見が合わず、すぐ家出をする。初めての参観日の次の日、マサトはお母さんと一番ひどいけんかをし、本気で家出をした。現実の生活の中で、自分のぶつかった事件に精一杯生きていこうとする子供の論理がみごとに描かれている。

こぐまのくまくん(低～中)

E・H・ミナリソック文 モーリス・センダック絵
松岡享子訳 福音館書店 680円

子ぐまのくまくんとお母さんぐまとの暖かい関係が描かれている話が四編はいつている。どの話も子供の心の動きをよくとらえ、邪気のない明るさと自然なユーモアがあり、子供に人気のあるアメリカの絵本。絵本から童話へと進む時期の子供達に最適である。

ゆきおんな(低～中)

松谷みよ子文 朝倉摂絵 ポプラ社 650円

昔、猟師の親子茂作と箕吉は白馬岳の奥深く迷い込み吹雪に会う。一夜を明かした山小屋で茂作は美しい娘に冷たい息をかけられ息絶える。翌年の吹雪の夜、宿を乞うた娘と結婚し、幸せな何年かが続いたある晩……。絵も語り口もすきとおるように美しい。

おかあさんがいっぱい(中～高)

東君平作絵 金の星社 880円

4年4組には、34人の生徒がいる。この子達にはいろいろなお母さんがいる。働いているお母さん、朝ねぼうのお母さん、離婚したお母さん等。34組のそれぞれの母と子のかかわりあいが暖かく描いてある。

グリーン・ノウのお客さま(中～高)

L・M・ボストン作 亀井俊介訳 評論社 1,200円

コンゴのジャングルからロンドンの動物園のおりにとじ込められたゴリラのハンノーは、ある夜脱走する。中国難民の少年ピンはオールドノウ夫人のいるグリーンノウでハンノーに会う。ハンノーをかくまうピン少年と彼を暖かく見守るオールドノウ夫人人と人、人と動物との愛情物語。全5巻。

そこつの電話(中～高)

春風亭柳昇作 学校図書 900円

表題の「そこつの電話」をはじめ、6編の新作落語が載せてある。落語家である作者が、子供達にも落語のよさをわかってもらおうと、現代の生活にむすびつけて作ったもの。楽しい話題と、語り口の面白さが生き生きとしている。

トンデモネズミ大活躍(中～高)

ポール・ギャリコ作 矢川澄子訳
岩波書店 1,700円

しっぽはなし、耳はウサギ耳、色は青一色というトンデモネズミはすばらしい勇気と知恵を持ち、次々にめぐり会う動物達を危険から助けてやる。最後に昔のくだらない「さだめ」によりトンデモネコにたち向かうことになる。空想の世界が楽しい。

わが町の自動車巡回 ⑤ 大社町立図書館

わが町の文庫車は「移動図書館大社号」といいます。この移動図書館大社号は、昭和56年に大社ロータリークラブの20周年記念事業の一環として寄贈されたもので、以来今日まで、毎月第2週と第4週の水曜日に運行し、計16ヶ所をステーションとして活動を続けています。

毎回積載する図書は400冊、うち150冊ほどは児童図書を入れています。

車は主として図書館に遠い町の周辺部を巡回します。この地域は自然に恵まれ、農村部あり海岸部あり山間部ありで、ぶどう畑の間を走り抜け、日本海の表情を楽しみ、緑のそよ風に心をなごませながら山路を駆け、四季折々の季節感を満喫しつつ図書を届けます。

巡回にあたっては、前日に町の有線放送を通じて利用を呼びかけておき、当日はまた各ステーションで放送を流して到着を知らせます。

前回借りた本を返しに来る人、新たに借りる人等で毎回100～150冊を貸し出します。移動図書館大社号を待ちかねて、毎回おばあさんと一緒にやってき

て幼児絵本を借りていく3才のNちゃん。保育所の子供たちに読みきかせるためにと数冊をかかえていられる保田さん。そして、図書館まではなかなか出掛けられないけれど、家事と育児の合間に少しずつでも読もうと読書欲に燃えるおかあさん。読書が何よりの楽しみと言われるおじいちゃん等。まだまだ決して十分とは言えない利用の現状ではありますがそれでも、それなりに常連もでき、ふれ合いを大事にしながらかけています。

現在の町立図書館は、いわば仮住まいの境遇にあり、蔵書数も読書環境も予算面も決して豊かではありませんが、懸案の大社中学校統合校舎の新築落成を機に、旧校舎の一部が図書館として再生活用されることになりました。加えて「だれんもで町を編む会」が主催して「町民の一人一人の手で町立図書館を充実させよう」と献本運動がすすめられています。これによって一段と巡回図書も充実するでしょうし私の本も加わっているという親近感から利用者もふえることが期待されます。愛され親しまれる存在でありたいと念じているところです。

NEWS

恒例の「子どものつどい」開く

5月12日(日)に県立図書館集会室において、小学校高学年を対象に「子どものつどい」を開催。本年は子供読書モデル事業にとり組んで2年目に当たりモデル町の吉田村の子供達の参加もあった。科学万博にちなみ、科学の本の紹介や人形劇や映画等の催しに楽しい一時を過ごした。



蔵書目録第12巻完成

県立図書館には、現在館内奉仕用としての図書が101,803冊あります。これらの図書はすべて目録に収録しています。今回刊行した蔵書目録第12巻は、昭和55年から58年までの4年間に当館で受入れた図書25,000冊を収録したものです。この目録は県内公共図書館・市町村教育委員会・県立学校等に配布しています。すでに配布済みの第1～11巻とあわせてご利用下さい。

人事異動

●お世話になりました。

館長 林 暁二(退職)

主査 藤岡大拙(島根県立女子短期大学へ)

主任主事 青木幸江(県立教育センターへ)

●よろしくをお願いします。

館長 錦織弘侃(県土木部から)

主任主事 松尾年子(県建築課から)

司書 石塚弘文(新規採用)